

◆西野周次 選 ～混沌の世を生きる～

てふてふと遊び呆けて卒寿過ぐ 柿本多映

武田鉄矢に「思えば遠くに来たもんだ」の歌がある。ふと来し方に思いを馳せれば、若き日に思い描いた理想と随分違う吾の存在。悪戯にふざけ、のほほんと生きてきた訳で無く、その一瞬、刹那を真摯に生きて来たという自負はある。しかし、卒寿に到って未だ成し得ていない何かへの忸怩たる思いも無いわけではない。あれよあれよと瞬く間に過ぎ去った歳月への戸惑いと感慨、自分への慈しみ。遊び呆けたとする蝶の正体とは、何時も傍にあった俳句そのものだったのではないだろうか。「卒寿過ぐ」の結句に、更なる高みを目指して俳句を極めんとする貪欲な意志と、なみなみならぬ決意も感じられる。

油虫そこに控へて沙汰を待て 市川和孝

げじげじ、百足虫、藪蚊等、生まれもって忌み嫌われている生物は多い。その中でも、とりわけ身近に居る存在の油虫は厄介者である。好き好んで油虫になった訳でなく、言わせれば恨み、雑言の類もぞろ出て来るに違いない。生きゆく為には危ない橋も渡り、悪行のひとつも成す。ある意味、人間の所業とも酷似している。その嫌われ者に引導を渡すべく、沙汰を待てと詠む。弱者を排除せず、いたぶらぬ優しさが垣間見える。秋元不死男に「蠅生まれ早や遁走の翅使ふ」があり、小林一茶に「やれ打つな蠅が手をすり足をする」の句がある。何れにも弱者を思い遣る温かい心情がある。

アタックを決めよ月までジャンプせよ 堀川絵奈

季語にもなっているラグビーやサッカーは勿論、テニス、野球が素材の句は多見するが、マイナーイメージのバレーボールが詠まれたものはほとんど見かけない。バレーをする人には垂涎の的の吟。「決めよ」「ジャンプせよ」の畳み掛けには、ここぞ好機を逃がすな、心して臨めと鼓舞する攻めの姿勢がある。「月まで」には、限界まで粉骨砕身励め、ベストを尽くせとの意味だろう。まさにスポーツ精神の神髄という躍動感、さわやかさを連想させつつ、人生訓をも想

起させる好吟である。

爺爺爺爺爺爺眠眠眠眠眠と蟬

八木 健

数ある虫の中から蟬を選び、その存在感を誇示する鳴き声を漢字のみの表記と二音で表現した。爺爺と鳴くは油蟬、眠眠と囁し立てるはミンミン蟬。漢字に変換された鳴き声は、うだるような夏の暑さの鬱陶しさを増長している。はからずも、灼熱の日射しの中、終の命を全うすべく鳴きしきる蟬の健気さをも浮き立たせている。鑑賞する側の想像力に下駄を預けた格好の句。

小次郎の真似してすうい夏燕

吉川正紀子

佐々木小次郎は、巖流島で宮本武蔵と決闘した実在の剣豪である。身の丈程もある長刀を自在に使う奥儀の燕返しは、つとに有名。一方、燕は直線飛行したかと思えば一転二転宙返り、袈裟懸けに飛ぶこともある。作者は燕の袈裟懸けの俊敏な飛び方を見て、鋭い太刀筋の袈裟斬りを想起したのだろう。桃山時代の武芸者を担ぎ出して、独創的な句となった。

酢海鼠や反骨ゆゑの不器用も

井上論天

人に無闇に迎合、同調する行為は、自らを貶める事に他ならない。とはいえ、自己主張、本意を強引に推し通すと、摩擦や軋轢を生む。それらを熟知しながらも、妥協を良しとせぬ生き様がある。人目を憚らず一志を貫く姿勢は、多くの賛同は得られずとも潔いものである。損得勘定では頑として動かぬ一徹さは不器用ではある。しかし、“出過ぎた杭は打たれない”の言葉通り、突出した反骨は次第に認知され容認され、確固たる立ち位置を得る。世の中まだまだ捨てたものではない。反骨や不器用を良しとする風潮も、まだまだ息づいている。

炎天や地球の焦げてゐる臭ひ

高須賀溪山

夏空や戦火を消せぬ大人たち

月城花風

桜咲くそれにつけてもウクライナ

曾我部えり子

太古の昔から、紛争の無い時代は皆無である。人間の持つ愚かしさ、残酷さは変わらない。天変地異ならいざ知らず、大国の論理、侵略者の一方的理屈に

よる爆破や殺戮は許しがたく、看過出来ない。掲句には、三人三様の言い回しと切り口で、戦争への怒りと、戦争回避、恒久平和への思いが絶妙に投影されている。

びりの子に拍手の嵐運動会

遠藤俊夫

運動に秀でた子にとっては、鼻高々の運動会。翻って、苦手な子にとっては、運動会、とりわけ優劣の明確に出る駆けっこは、頭痛の種だろう。しかし、懸命に走るビリの子へは、時に万雷の温かい拍手が送られる。また、いつもビリの子が、そのまま走ればよいものを転倒した子を待って、手を繋いで一緒にゴールしたという微笑ましいエピソードもある。私心より融和を優先し、少子化の時代においては子どもは地域一帯で育てたい。心温まる句である。